

教学仏教の伝播経路に関する研究

—山西省調査報告—

長谷川 昌弘

はじめに

平成三年度国際学術研究「中国における佛教の伝播経路に関する実態調査」は愛知学院大学教授鎌田茂雄博士を研究代表者として、平成四年三月、山西省南部の実地調査を遂行した。この調査は仏教研究における文献学のあり方を再考させる重要なものであったが、鎌田先生には筆者を「教学仏教の伝播経路の研究」の担当者として本調査の一員に加えて頂き、深甚の謝意を申し上げる。また調査の際には他の研究分担者である佐藤悦成先生、成河峰雄先生、岡島秀隆先生そして中国社会科学院宗教研究所教授丁明夷先生、山西省社会科学院教授崔正森先生、通訳の黄玉雄氏にもそ

教学仏教の伝播経路に関する研究（長谷川）

れぞれ大変お世話になり厚く御礼申し上げます。

さて山西省における実地調査は華北仏教の発展を考える上で多くの問題を浮上させたと思われるが、そのどれもが文献学的にはある程度定説となっている中国仏教史に再考を促がす重要なものであると思われる。しかしながら、もとより筆者は浅学菲才のためそのすべてについて考察を加える力もなく、またその問題意識自体も希薄にすぎないと思われるので、本報告書では数点に絞って考察を加えた

天寧寺

太原から南西へ約六十キロ程離れると交城県になる。交

城県といえは一般的には浄土宗の祖庭である玄中寺が有名であるが、今回我々が調査に訪れたのは県城の北方約三キロに位置する卦山天寧万寿禅寺である。

その山号となつてゐる卦山はもと万卦山と称し、八つの峰がそびえてゐるところから『周易』の八卦から由来した名だといふ。創建に関しては『中国名勝詞典』は唐貞観六年（六三二）とするが、現在寺の後方の山腹に位置する石仏堂に存する「明重修万卦宝灯王仏殿記」に具体的な年代が記されている。右の碑は明弘治十二年（一四九九）に興化寺住持である性澄禅師の文により、楊士旻、楊寧父子が刻石して建立されたものであるが、それによれば、

肇自唐貞観元年九月内始建梵刹、山名萬卦、地號爻峰。
按三十三天之形、立七所九會之法。

なる記述があり、唐貞観元年（六二七）の創建ということになる。そして「八十華嚴」を依り所とした華嚴宗の寺であつたことも窺われる。現在も石仏堂の入口の門上には「華嚴宗」の石製扁額が掲げられているが、おそらくは右の碑文に端を発するものであらう。右の碑文は時代的には新しいため、その記事を鵜呑みにはできないが、天寧寺創建の

重要資料であることには間違いない。

この他にも天寧寺には四十余りの碑刻が現存するが、その内最古と思われるのが、「唐華嚴一会之碑」といわれるものである。この碑は汾州衆香寺の克誠の選文で、唐貞元十二年（七九六）の建立である。『山西通志』卷九十二には「天寧寺残碑」として記載があるが、

大半剝落。有太尉李公抱眞字。

とある如く、現在では殆ど判読できないほどである。かうじて、

搜攬華嚴句禮一周、文披千遍、遂愿造九會之像設。

なる文章から、やはり華嚴道場であつたことが判明するのである。ただここで注意を要するのは『山西通志』にも述べられる李公であらう。即ちもう一つの古碑である「唐華嚴三會普光明殿功德碑」といわれる碑に、この李公のことが述べられているのである。右の碑は貞元十六年（八〇〇）の建立であるが、やはり現在では殆ど判読できない。しかし、幸いにも『交城県志』に碑文が収録されている。それによれば、

則河東節度監察支度營田等處置使、北都留守、銀青光

祿大夫、檢校禮部尚書兼御史大夫、太原尹、上柱國、隴西□□□□□□□□□□李公說之所營建也。：中略：禪師俗姓元氏、法字道融、鳳翔天興人也。：中略：轉竜藏則唯精唯勤、禮華嚴則一句一拜。其安禪也、情無散亂、其得定也、身不動搖也。

とあり、天寧寺普光明殿は道融禪師の尽力と李公即ち李說の財施によって建造されたことが明らかである。就中李說(七四〇―八〇〇)については『旧唐書』卷十二、『新唐書』

卷十一に紀伝があり、山西省一体の地方官を歴任したことにはつきりしているが、例えば『唐文拾遺』卷二十三に、

臣説言臣所部太原府交城縣石壁山寺、今月二十二日夜甘露降于寺内戒壇。：中略：貞元十二年九月二十五日。

なる記事があるように、石壁山寺即ち玄中寺にも関係しており、深く仏教に帰依していたと思われるのである。一方で貞元間に天寧寺の整備に尽力した道融禪師は貞元十六年の碑の記載によれば、俗姓は元氏で陝西省鳳翔の人で、まさに華嚴宗宣揚に一大努力を払った高僧であることは間違いないが、『統高僧伝』等に記述がある道融とは年代的に符合せず、また各種石刻資料を検索しても現時点ではそ

教学仏教の伝播経路に関する研究(長谷川)

の名を見出せない。時代的には清涼澄観(七三―八三九)とほぼ同時期と思われることから、華嚴宗の発達の歴史に一石を投じるものと思われる。またかつては天寧寺には唐代華嚴経塔があつたことがわかつており、文革前に存した六塔には「第四之会」、「第五之会」、「第八之会」等の記載と貞元・元和年間の建立も確認されている。これらを考え合わせると、天寧寺は当時道融が住持し山西の華嚴の拠点であつたことはほぼ間違いないであろう。

宋代から金代にかけての様相は未だ不明であるが、金末元初第二十一代住持虚彦が元朝宰相である耶律楚材(一九〇―一二四四)を功德主と仰いだ事が判明している。

『湛然居士文集』卷八に次の如き「万卦山天寧万寿禅寺命予爲功德主因作疏」が収められている。

惟萬卦之古刹。實萬松之舊遊。有虚己(彦公道號)飛書。請湛然作主。勉爲提領。良慰慇懃。山色水聲。永作道人活計。漁歌樵唱。備傳衲子家風。謹疏。

右によれば時の一大宗師であつた万松行秀(一一六―一二四六)がかつて訪れたこと、虚彦の懇請で功德主となつたこと、そして曹洞の家風が行われていたことが窺われる。

現在寺の後方に墓塔林が存するが、倒れたものも多く調査で確認できた墓塔は第二十代偉公禪師のものが最も古く、その他第二十一代虚彦、第二十二代元臻、第二十三代海偉と確認することができ、おそらく厳密に調査をすれば第二十代以降の墓塔はかなり確認が可能かと思われる。遺憾ながらこれら元代の住持について現時点で文献的に確認することは甚だ困難であるが、『湛然居士文集』の記事や右の墓塔郡の存在を鑑みると金元代における北方の曹洞宗の発展史の重要な資料であることは首肯できるであろう。

青蓮寺

沢州で最も有名な寺が、千年古寺として知られる青蓮寺である。この寺は淨影寺慧遠の古道場としてつとに著名であるが、寺内に数多くの石刻資料が存し歴史の長さを感じさせる。今回の調査でそのすべてを確認することはできなかったが、これらの資料は単に青蓮寺の歴史のみでなく中国仏教史を解明する上でも非常に重要なものである。そこでさまざまな文献に収録されている青蓮寺に関する石刻資料を今一度整理したいと思う。青蓮寺に関する資料

を多く収める文献としては『山右石刻叢編』、『山西通志』より編纂された『山西金石記』、『鳳台県志』より編纂された『鳳台金石輯録』等が挙げられるが、この内最も広範かつ信頼性が高いと思われるのは『鳳台金石輯録』である。なぜならば『山右石刻叢編』は『山西金石記』を根拠にしている記事が多く、その『山西金石記』は『鳳台県志』を根拠としている記事が多いためである。ただし碑文そのものは『山右石刻叢編』が最も詳細である。次に掲げる資料は『鳳台金石輯録』に収録されるものの内で、青蓮寺に関するものを年代順に整理したものである。

- | | | |
|---|------------|-----------|
| 1 | 古仏龕磨崖記 | 武定元年（五四三） |
| 2 | 慧遠法師遺跡記碑 | 宝曆元年（八二五） |
| 3 | 弥勒菩薩上生変讚並序 | 宝曆元年（八二五） |
| 4 | 青蓮寺碑記 | 太和七年（八三三） |
| 5 | 石経幢 | 開成四年（八三九） |
| 6 | 青蓮寺山田石碣記 | 咸通八年（八六七） |
| 7 | 慧峯和尚塔記 | 乾寧二年（八九五） |
| 8 | 上方院銘記 | 唐代 |

9	青蓮寺牒准土地記	開平二年(九〇八)
10	硤石山石壁詩刻	天祐一一年(九一四)
11	石経幢	天祐一八年(九二一)
12	太平興国牒	太平興国三年(九七八)
13	峡石山修弥勒殿記	景德四年(一〇〇七)
14	青蓮寺石柱記	熙寧九年(一〇七六)
15	峡石山題名記	元豐八年(一〇八五)
16	青蓮寺石柱記	元祐四年(一〇八九)
17	福巖院題名記	紹聖三年(一〇九六)
18	青蓮寺石柱題名記	元符元年(一〇九八)
19	浄影寺山場	崇寧四年(一一〇五)
20	存公和尚塔志銘	政和六年(一一一六)
21	青蓮寺石柱題名記	宣和七年(一一二五)
22	潮公和尚塔志銘	天会五年(一一二七)
23	福巖院鐘銘	大定三年(一一六三)
24	擲筆台題名記	大定六年(一一六六)
25	擲筆台題名記	大定一九年(一一七九)
26	青蓮寺詩刻七絶	明昌六年(一一九五)
27	青蓮寺石柱題名	承安五年(一二〇〇)

教学仏教の伝播経路に関する研究(長谷川)

28	峡石山福巖院記	泰和六年(一二〇六)
29	青蓮寺詩刻七律	泰和六年(一二〇六)
30	青蓮寺詩刻五言古詩	崇慶元年(一二一一)
31	青蓮寺石柱詩刻七律	興定五年(一二二一)
32	観音堂靈蹟感応記	至元二年(一二三六)
33	重修法蔵記	至元二年(一二三六)

右の如く『鳳台金石輯録』には三三の資料が認められるが、これ以外のものとして『山西金石記』には「福巖寺牒」(明昌四年)と「福巖寺石記」(崇慶二年)、『山右石刻叢編』には「福巖院重修仏殿記」(大定四年)が収められている。ここではこれらの資料をもとに、宋代に至るまでの青蓮寺の歴史を明らかにしたい。

さて青蓮寺は一般的に慧遠の古道場として有名であるが、その開創についてはNo 4の「青蓮寺碑記」等が北斉の曇始禪師としている。この碑文は唐僧龍興寺道振の選文になるものであるが、今最も詳しい記述は「龍興寺造上方閣画法華感応記」と題される『山右石刻叢編』巻九に収められたものである。

硤石之名本非寺號。徑通人行時共稱焉。初有曇始禪師。大齊起義之首奏藏陰寺講涅槃經。感野雉來藏神遺□狝猴奉菓山神獻飡時之異人乎。其難識矣。

右によれば、青蓮寺のもとの呼称は硤石寺以前に藏陰寺と称していたことが知られ、大齊のはじめに曇始禪師がここで涅槃經を講じたのに端を發したといえよう。この曇始禪師については『高僧伝』卷十、『神僧伝』卷一等にその伝が収められており、廃仏で知られる託跋寿が剣でもつても切れず虎を仕向けても曇始には近づこうともせず、これを機に因果の説法を受けてまた仏教を保護したこと等、神奇の僧であったことが知られる。しかしながら、『高僧伝』に、

釋曇始、關中人。自出家以後多有異迹。晉孝武大元之末、齊經律數十部往遼東宣化。…中略…義熙初復還關中開導三輔。（『大正藏』五〇、三九二b）

とある如く、少なくとも東晋の義熙年間（四〇五―四一八）頃に活躍した人であり、前述「法華感應記」の「大齊」を南朝の南齊（四七九―五〇二）とみなしても時期的に少し無理を生ずる。まして「青蓮寺碑」をはじめ「福巖院鐘銘」

等でははっきり「北齊」（五五〇―五七七）としており、より開きを生ずるのである。また『山右石刻叢編』卷二、『金石録補』卷九に「曇始禪師行狀記」が収められるが、碑の建立が武平元年（五七〇）であることと太原の西約一舎に存すること以外の記述は『高僧伝』と同様である。これらを考え合わせると、北齊の曇始禪師の開創というのは、捏造か或いは晋代とは全くの別人であるかのどちらかということになるが、遺憾ながら現時点では特定できない。

その後周代にこの地に慧遠がきて道場を開創した。その経緯については唐僧紫羽によるNo2の「慧遠法師遺跡記碑」に記される通りであるが、詳しい考察は鎌田先生の報告書を参照されたい。

隋代の青蓮寺の様相については不明であるが、No19の「淨影寺山場」に、

大隋開皇七年曇馥法師所建立。とあり、開皇七年（五八七）曇馥法師がこの寺を建立したとある。この碑は今回の調査で確認することができたが、碑名は「福巖淨影山場之記」であり、碑文も大隋開皇七季曇馥禪師之所立也。

が正しい。しかしながら、立碑は宋崇寧四年（一一〇五）

であること、そして曇叡禪師なるものを確定できないこと、また「浄影寺山場」に、

曇叡是否曇始抑或另爲一人。

とあり、曇叡と曇始が同一人物か判断を下しかねていること等からすると、内容的にはかなり疑問が残り信頼し兼ねるのである。

さて唐代の青蓮寺の様相については、やはり前出の「法華感応記」が最も詳しく伝えている。

近唐代宗之運、神墨禪師唐之貴葉學究典墳。善閑在老捨榮慕道晦跡亡名藏陰。冥坐林藪行節孤迅、人難可儔。

貞元之時有智通法師、近朝奉聰惠天假其靈善談涅槃、

眞文制六波羅密疏流于地也。今有惠愔禪師業善儒門博

通子史、高道不事棄筆從緇究禪理而眞心自閑習正觀定

惠。雙運居無定所雲林是家。遠昂靈跡來屆此山。時有

智岑善講天臺教門、深遠妙源精義尤博。誓爲佛使行化。

人間來亦於此知山靈秀景勝處、幽名僧繼踵。其時愔公至

此欲過嵩岳求法華道場之處。土地時運宿緣所、追乃感

邦伯邀留、及有清信長老結邑請住去。大和二年上方勅

教学仏教の伝播経路に関する研究（長谷川）

造僧院兼置普賢道場。

右によれば、代宗の時代（七六一―七七九）に神墨禪師がここに住し、貞元年間（七八五―八〇六）には智通法師が住し、『六波羅密疏』を著して世に流行した。後に天台教門を善くする智岑が住し、この地の幽玄さが広まった。そんな折に惠愔禪師は嵩岳に法華道場を求めようとこの地を訪れたが、清信長老が邑を結んで住職するよう請願し留まることがになったのである。大和二年（八二八）上方に僧院と兼ねて普賢道場が設けられたのである。就中智岑については他の資料が智岑とするも、いずれの僧侶も遺憾ながら文献的に確認することができない。しかし、大和二年に現在の新青蓮寺と古青蓮寺即ち上院と下院の基礎ができあがったことに間違いはない。そしてその後前出「法華感応記」に、

邑今有六七人、同爲竭力崇供山寺科擧并造閣一所、兼

素畫彌勒…後略…。

とある如く、大和七年（八三三）六十七人の信徒の協力で弥勒閣が造営されている。その後の様相についてはNo6の「青蓮寺山田石碣記」により知ることができる。

大和九年僧惠愔説郡主王中丞減税若干畝。会昌三年沙汰若干畝。又咸通八年孟員外聞奏請勅賜青蓮為額。剖地若干畝。

右によれば大和九年（八三五）惠愔が郡主を説得して若干畝の土地を減税にし、会昌三年（八四三）にもまた減税された。そして咸通八年（八六七）には青蓮の寺号を賜り、勅額寺院となつてまた土地も増加したのである。このようにみると大和年間における惠愔の存在はまさに今日の青蓮寺の基礎を築いたといえよう。また咸通年間に勅額寺院となつたことは、その後の廃仏を考えると青蓮寺にとっては非常に幸運且つ重要なことであつた。以降の唐代の様相については詳しく知ることはできないが、No 7の「慧峯和尚塔記」によつて少なくとも慧峯和尚が住持したことは確認できる。碑文は、

唐故先師和尚汝州襄城縣人也。俗姓賀蘭氏法號慧峯於中和壬寅歲八月二十八日遷化去。乾寧乙卯年建造。

なるものである。この塔は今回の調査で確認することができたが、年号等文字は比較的明瞭で同一の文であつた。さすれば慧峯は中和二年（八八二）に遷化した人で、碑の建

立が乾寧二年（八九五）であることは確かである。

唐代に寺城を拡大し隆盛した青蓮寺は、宋代にまた一段と拡充したのである。No 12の「太平興國牒」によれば、

澤州奏准行所管存留有無名額僧尼寺院共三十二所。靈巖院宜賜法輪、青蓮寺宜賜福巖為額、勅命指揮書勒懸掛准勅故牒、太平興國三年五月二十日。

とあり、太平興國三年（九七八）福巖禪院なる勅額寺院となつたのである。『山右石刻叢編』の「福巖淨影山場之記」に、

大宋崇寧四季歲次乙酉三月一日、因下院淨影寺齊會、有住持福潤預日赴上寺、請巒禪師說法。

とあることから、福巖禪院となつたのは上院即ち新青蓮寺であり、下院即ち古青蓮寺はそれ以後淨影寺と称したのである。そしてこれ以降明代まで二寺は分立して、それぞれ住持が置かれたのである。その結果特に新青蓮寺は勅額寺院として国家統制を受ける一方、様々な点で保護を享受したことは想像に難くない。

以上簡略ながら青蓮寺の歴史について述べたが、この寺が慧遠の遺跡であるということだけでなく浄土宗の一拠点

であつたことは唐代の碑刻等からも明らかであろう。従来浄土宗の拠点としては玄中寺のみが着目されてきた感が強いが、浄土宗の伝播を考える上で青蓮寺が重要な寺院であることは間違いない。また今回は紙数の都合で言及できなかったが、青蓮寺には現在でも宋代の建築物がいくつが残っている。これは換言すれば、南宋代即ち金代における仏教保護を裏付けるものであり、近世以降の仏教史解明にも青蓮寺は重要な役割りを果たしているといえるのではないだろうか。

開化寺

高平県の皇城から東北へ十七キロメートル程行くと舍利山がある。この中腹に位置するのが舍利山開化寺である。寺への道幅は非常に狭く、我々もマイクロバスではなくジープに乗り換えての出発であつた。現在は山の麓に小さな集落があるが、寺は荒廃しきつた状態である。

開化寺はもとの名を清涼寺といい、創建は五代後唐の同光年間（九二三―九二五）頃とされるが様々の問題をはらんでいる。その創建について文献学的に立証するのは非常

教学仏教の伝播経路に関する研究（長谷川）

に困難であるが、寺の南約一キロメートルに墓塔が二基あり興味深い記載が存する。その一基は「大愚禪師塔」と呼ばれるもので、石造の方形のものであるが、塔身の後壁に、禪師姓劉法號大愚潞城人也…中略…同光三年歲次乙酉辛卯建造。

の文字が読みとれる。これによれば寺の創建頃に大愚禪師なるものが大きく関わっていたと考えられる。しかしながら、各種僧伝等からその名は見出せず、今一度墓塔の銘文を確実に判読する必要がある。

さて開化寺の大雄峯殿はそれ程大きなものではないが、柱に年月が記されており、建築が北宋熙寧六年（一〇七三）であることがわかる。そして殿内には北、東、西の全壁面に壁画が描かれているのである。現在殿内には何もなないため、まさに壯観である。内容的には本生物語が中心であるが、宋代の庶民生活までもが描かれており、宋代文化研究の上からも重要なものである。中国においては仏教寺院の壁画は数多く存するが、ほぼ完全な状態を伝えているのは極めて稀であり、その点においても開化寺の壁画は非常に優れている。また壁画の題記が残っており、宋紹聖三年（一

○九六）六月に製作が開始されたことを記している。また同時に作者が郭発であることも判明している。残念ながら現在ではこの題記はかなり薄れており、判読はかなり難しいと思われた。作者の郭発については民間の画工であったためか、その優れた筆致に関わらず各種画史類をつぶさに検討してもその名を見出すことが出来ない。しかし、その芸術手法は人物、山水、界画すべてにわたって卓越しており、中国画人の中でも珍しいケースだと思われる。ただ当地は五代に山水画の巨匠荆浩を生んだ土地であり、土壌的には優秀な画家が輩出しても何ら不思議ではない。いずれにしても開化寺の壁画は、当時の仏教が如何に民衆に浸透していたかを窺わせる貴重な資料であるとともに、北宋代より禅宗が隆盛して多くの寺院が禅寺に改称したが、それは我々が短絡的に坐禅を中心とした仏教教化が行われたと考えることを戒めてくれるものである。また一方でこのように優れた画師が地方の山寺に作品を残していることは、中国絵画史の定説にも再考を促すものであろう。

ところで寺の境内に「澤州舍利山開化寺修功德記」なる碑が存している。そして碑文の末尾ははっきりと「大観庚

寅孟冬」、「崔静」なる文字が読みとれる。即ちこの碑は大観四年（一一一〇）崔静の選文になるものであるが、問題は文字が王羲之の字を集字していることである。書聖王羲之の流行は時代によってかなり流動的であるが、一般的には唐代に大変流行し宋代は革新書道の時代としてむしろ反王羲之の風潮があったのである。さすれば何故にこの寺の功德記に王羲之の字を集字したのか疑問が残るのである。そしてもう一つは古来から北方では各種造像記にみられるような峻険な書風が多く、王羲之の尊重はどちらかといえば南方でより顕著であったことである。この二点からだけでも開化寺の功德記は特異なケースとして注目されるのである。今、崔静なる人物は各種書史類を検索してもその名が見出せず、書家ではないとも考えられる。そうなるとますます疑問は深まるのである。今回の調査を通じて改めて山西省の石碑に注目すると、他にも王羲之の集字碑が存しているのである。王羲之の自身は道教信者であったことが知られており、このような形での仏教との結びつきは中国書道史においても指摘されていないところである。この点については何れ稿を改めて論ずる必要がある。

以上開化寺は文献的に研究することは甚だ困難な寺であるが、寺内の遺跡は特に仏教文化史上極めて重要な意義を持つものが多く、山西地方の仏教文化の典型を示している可能性も高いのである。

法興寺

長子県の県城から東南へ約十五キロメートル程のところ
に慈林山がある。この山はそれ程高い山ではなく、山西省
の他の寺院の所在地からすれば丘と称してもよいほどであ
る。そしてこの山の中腹に南面して法興寺はある。当初我々
が訪れた際は全域が板楯でおおわれて錠前がかかっており、
調査は不可能であると思われる。しかし同行の中国側の先
生方の努力によって留守番役の尼僧さんがみつきり、入山
することができたのである。現在寺内は大修復中であり詳
細な調査は不可能であったが、いくつかの重要な発見もあ
った。

さて法興寺の歴史については、『長子県志』より編纂さ
れた『長子金石志』に収録された資料が最も参考になろう。

教学仏教の伝播経路に関する研究（長谷川）

- 1 鄭惠王石記 咸亨四年（六七三）
- 2 慈林山法興寺重修僧堂記 咸平二年（九九二）
- 3 潞州調子県慈悲林山寺先賢堂記 同右
- 4 程躋詩石刻 大定一六年（一一七六）
- 5 王文甫詩石刻 大定二〇年（一一八〇）
- 6 法興寺碑 至元一〇年（一二七三）

この他のものとしては『山西金石記』に収められた次のもの
があげられる。

- 7 智乘院碑 咸亨五年（六七四）
- 8 法興寺佛殿碑 元豊四年（一〇八一）

ただしこの二碑は全く碑文が収められていない。No 8につ
いては『山右石刻叢編』に収録されている。このように法
興寺は非常に長い歴史を有していると思われるのに比して、
資料的には乏しいのが現状である。しかし、調査の結果こ
れらを補完できる部分もあり、以下法興寺の歴史について
述べてみたい。

法興寺に関する資料で最古のものはNo 1の「鄭惠王石記」である。この碑については今回の調査で実物を確認することができた。碑文はほぼ完全に明確に読みとることができ、多くの重要石碑が剝落が激しく時には紙拓が貼られている中で、極めて保存状態の良いものであった。碑文には、

王即太武皇帝之代拾參子。往任潞州比於此山奉爲先聖
敬造石舍利塔壹所下、并有勅賜舍利骨參漆粒、造藏經

三千卷。：中略：咸亨四年十月八日檢校功德僧洪滿建。とあり、鄭惠王即ち王元懿が潞州へ赴任する際にこの山で先聖のために舍利塔を建立し、舍利骨三十粒を賜って蔵經三千巻を造ったのが法興寺の開創である。しかしながら、この碑文は『金石萃編』等多くの文献に収録されながら、すべての編者が疑問を呈していることからすれば改めて検討を要すると思われる。今遺憾ながら僧洪滿を特定できないが、開創が咸亨四年（六七三）以前であることは確かである。

法興寺の唐代の様相についてはほとんど不明であるが、宋代に大規模な伽藍整備が行われたようである。まずNo 2の「重修僧堂記」に「咸平二年九月十八日」の記載がみら

れるが、咸平二年（九九二）に僧堂が修復され、次いで元豊四年（一〇八二）に仏殿が新築された。No 8の「法興寺仏殿碑」には、

天聖中釋法信與麻衣從深入、又闢其基敞三門於其前。

：中略：佛殿始作於晉開運二季距今一百三十餘載、垣穿城夷榱桷傾圮。

とあり、そもそも開運二年（九四五）に作られたものであったが傷みがひどく、天聖年間（一〇二三―一〇三二）には釈法信がまず三門を整備したことが窺われる。そして仏殿新築後に円覚殿が作られるのである。文献資料では確認できないが、今回の調査で円覚菩薩を作った記録である「新修聖像之記」が確認でき、その年月日が「政和元年六月十五日」であることも明らかになったのである。したがって円覚殿そのものも政和元年（一一一一）前後の完成であることは間違いない。そもそも円覚殿は唐代の『円覚経』尊重に端を發し、現在では四川省に多くみられる。法興寺の円覚殿は山西省唯一のものであるだけに、その存在は様々な問題を提起してくれるであろう。しかし、今回の調査では時間的な制限もあり、また工事中のために数多くの石碑

が雨ざらしのまま倒されていてその碑題すらなかなか確認できない状況であったため、詳しく論ずる術を持たない。

以上の如く法興寺はその長い歴史に反して文献資料に乏しく、その全容がはっきりしない。しかし、寺内に数多くの石刻資料が存しており、これらの研究によって山西省南東部の仏教受容・発展を明らかにし得る可能性が高い。早急な整備とともに再調査の必要性を熱望するものである。

おわりに

今回の実地調査は二十二ヶ寺に及ぶものであったが、そのどれもがわれわれ中国仏教を学ぶ者にとって貴重な示唆を与えてくれた。本報告書で取り上げた数ヶ寺のみでも、改めて文献だけにたよる研究の危険を感じさせてくれたと思われる。

特に今回の山西省南部については、従来文献学的にもあまり重要視されていない地域であり、また現在でもかなり交通が不便な地域のため余計に研究対象から疎外されてきたのではなからうか。しかしながら、調査の結果、小論では詳しく触れ得なかったが塑像、壁画、建築等々、少なく

教学仏教の伝播経路に関する研究（長谷川）

ともこの地域が仏教芸術の宝庫であることは間違いない。それは仏教が決して傍系でなくこの地方でしっかりと民衆の中に溶け込んでいた証しでもある。その意味において教学仏教についても、従来の長安のみを中心とする考え方に再考を促すものと思われる。

今後より一層詳細な実地調査が実施され様々な新資料が発見され、真の中国仏教史が浮上することを切に希望するものである。